

平成29年度 第60回関東高校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術委員 川口青陵高校 山田 純輝

6月3・4・5日の3日間で第60回関東高校サッカー大会が埼玉県で開催された。

大会は、各都県1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとし、各グループ8チームによるトーナメント方式で行われた。Aグループの1位、2位が全体での優勝、準優勝。また、Bグループの1位が全体の第3位となる大会規定である。地元埼玉県からは、Aグループに昌平高校、Bグループに正智深谷高校が出場した。

昌平高校は1回戦で日体大柏高校（千葉県1位）に延長戦の末3-2で逆転勝利を収め、準決勝は、さくら清修高校（栃木県1位）に3-0で勝利、決勝戦では三浦学苑高校（神奈川県1位）に2-0で勝利し、関東大会初優勝という輝かしい結果を残した。一方、正智深谷高校は1回戦で座間高校（神奈川県2位）に3-1で勝利し、2回戦は宇都宮短大附属高校（栃木県2位）に4-1で勝利、Bグループの決勝である3位決定戦で前橋育英高校（群馬県2位）に延長戦の末0-0、PK4-5で惜しくも敗れBグループ2位という結果となった。

昌平は、初戦の日体大柏とのゲームが事実上の決勝戦と言われる程、今大会屈指の好カードであり、ここを勝ち切れたことで優勝への弾みをつけた。攻撃的なポゼッションスタイルで主導権を握ろうとするも、日体大柏の前線からのハイプレスや切り替えの早さに苦しみ前半はチャンスを作り出せなかった。一方の日体大柏は、スピードのあるFWが背後を突く攻撃を狙いながらも、相手守備の陣形が整うとスローダウンし、各選手が良いポジションを取り、確かな技術でテンポよく効果的にビルドアップを試みてチャンスを伺う魅力的なチームであった。前半は、日体大柏ペースで進み、PKを与えてしまい0-1。後半早々にもカウンターから失点し0-2。その後、積極的な守備からボールを奪う回数が増えたことやMF⑬原田をボランチに投入したことで流れが変わる。⑬原田やボランチ⑦山下にボールが集まりFW⑨佐相、トップ下⑩洪屋が効果的にボールに絡むことでリズムが生まれ、本来のポゼッションサッカーを取り戻して流れの中からMF⑭古川が1点返す。後半のアディショナルタイムにもセットプレーからDF⑥関根が劇的な同点ゴールを奪い、土壇場で2-2の振り出しに戻す。勢いは止まらず延長後半、CKから⑥関根のヘディングシュートが決まり3-2。⑥関根はこの試合2ゴールの活躍で初戦突破に貢献した。

準決勝は、さくら清修と対戦した。前半はさくら清修の組織的な守備の前に効果的な縦パスを供給することができず、シュートも少なかった。後半に入り、DFやボランチから効果的な縦パスが入るようになり、FW⑨佐相、トップ下⑩洪屋にボールが収まり、そこからサイドへ展開し迫力のある攻撃を仕掛けた。中でもSB②堀江のタイミングの良いオーバーラップが効果的で多くのチャンスを演出した。サイド攻撃で生まれた中央のバイタルエリアを制し、⑩洪屋のミドルシュートとMF⑭古川の2ゴールによって3-0で快勝し、決勝進出を決めた。

決勝は、三浦学苑と対戦した。チーム全体のバランスが良く、特にボランチ⑬原田が攻守にわたって躍動する。パスや推進力のあるドリブル突破で攻撃を牽引し、守備でも予測や準備の良さが際立ち相手の攻撃の芽を摘んだ。初戦でチームの中心であるボランチ⑦山下が負傷して戦線離脱したが、その不在を感じさせない活躍であった。前半からDFからボランチ経由で丁寧にビルドアップし、チャンスを伺うが三浦学苑のコンパクトな守備の前に攻略することができなかった。後半、昌平の攻守の切り替えがより早くなり、高い位置でボールを奪う回数が増えた。中盤での

ボール奪取からMF⑩高見へスルーパスが通り、ゴールに冷静に流し込み先制。その後も中央での距離感の良いパスワークで相手を翻弄するなど主導権を握り続けた。この試合で存在感を示した⑬原田が右サイドからのパスをワンタッチでゴール左隅に流し込み、2-0として初優勝を決定づけた。

昌平は、県予選準決勝から関東大会決勝までの5試合全ての試合で前半は無得点、後半は複数得点という結果であった。これは特筆すべきことであり、前半からボールを大事に保持し主導権を握りながらチャンスを伺うと同時に相手の体力や集中力を奪い、後半に得点を重ねることができたのではないだろうか。優秀選手には、GK①緑川、DF④石井⑥関根、MF⑬原田⑭古川⑩洪屋、FW⑨佐相の7名が選出された。

正智深谷は、初戦で座間と対戦した。FW⑧梶谷を起点にサイド攻撃からゴールに迫る。DFからの前線へのロングボールが効果的で、⑧梶谷がDFの背後のスペースでボールを受け、GKとの1対1を落ち着いて決めて先制。その後は座間の献身的な守備に苦しめられ、前半のうちに1-1に追いつかれる。後半は両チームともに切り替えが早く、見応えのある展開となるが、一瞬の隙をついた正智深谷のMF⑬萩原がDFラインのギャップでボールを受けると左足でシュートを決め、2-1で勝ち越す。その後もMF⑯山根がヘディングシュートで1点を追加し、3-1で初戦をものにした。

2回戦は、宇都宮短大附と対戦した。両チームともに前線からの守備はあまり見られずバランスを保ちながら探り合う展開となる。宇都宮短大附は個々のスキルが高く、前半主導権を握る時間が長かったが、正智深谷が少ないチャンスをものにする。ミドルサードで得たFKからDF⑤孫の折り返しをDF④中村がヘディングシュートで押し込み先制に成功する。後半も宇都宮短大附が主導権を握るも、ショートカウンターからFW⑧梶谷が個人技を生かして追加点を挙げ2-0とする。FKから1点を許し2-1となり、勢いは宇都宮短大附へ傾く。しかし、正智深谷は選手交代を効果的に使い、前線を活性化させ、カウンターからMF⑬萩原が追加点、さらにMF⑯山根が1点を追加し4-1で勝利し、Bグループ決勝である3位決定戦に駒を進めた。

3位決定戦は、前橋育英と対戦した。前橋育英は、県予選からセカンドチームで今大会に臨んだチームであったが、テクニックや守備意識の高さが際立つチームであった。正智深谷は、DFからスピードのあるSHの背後のスペースにロングボールを送り、主導権を握ろうとするも前橋育英の組織的な守備の前になかなかチャンスを作ることができない。守備では、良い距離を保ちながら縦パスを入れさせず、ロングボールに対してもCB④中村⑤孫を中心に跳ね返しチャンスを与えず前半は膠着状態のまま終了。後半に好調のFW⑧梶谷やMF⑨須々田を投入するなど選手交代をすることでゴールをこじ開けようと試みる。しかし、前橋育英のコレクティブな守備の前に得点を挙げることはできない。逆に、前橋育英の前線からの積極的な守備により低い位置でボールを失い、決定機を作られる。それでも最後まで諦めないDFやGK①根岸の好セーブもあり、得点を許さない。延長も含めてゴールは生まれず0-0で勝負はPK戦へ。PK4-5で前橋育英に敗れ、正智深谷にとっては悔しい結果となった。

正智深谷の堅守速攻スタイルは、関東大会でも健在でBグループ決勝（3位決定戦）まで進出した。優秀選手には、DF⑤孫、FW⑧梶谷の2名が選出された。

今大会を振り返ると、地元埼玉開催で、本県代表の2校がA、B各グループで決勝まで進出し、昌平が初優勝を飾るなど強さと存在感を示す形となった。両校は、関東の中でも技術レベルが高

く、主導権を握る時間も長い好チームであった。しかし、全国大会になると他地域の強豪校や、関東でも今大会に出場していないプレミアやプリンスリーグに出場している高校があるため、さらに上を目指し、強化していく必要がある。特に守備面で、球際の強さやコレクティブで連動した守備を徹底することに磨きをかける必要があると感じた。埼玉県にとって関東で優勝することは通過点に過ぎないはずである。埼玉県の名を全国に轟かせるためにも、昌平、正智深谷の両校には今大会の経験を糧にさらなる飛躍を期待したい。